

《論 說》

外骨雪冤祝賀会

——大日本頓智研法始末——

堅 田 剛

一 雪冤祝賀会

昭和九（一九三四）年十月十一日のことであるが、日比谷公園内の松本楼において、宮武外骨の筆禍雪冤祝賀会と称する奇妙な宴会が開かれた。出席者は外骨を除いて四十二名。その中には、尾佐竹猛、穂積重遠、瀬木博尚などの名前が含まれている。この日の集まりには、いったいいかなる目的が込められていたのだろうか。

「外骨筆禍雪冤祝賀会」の案内状は、これに先立つ十月六日付で関係者に発送された。その一部を紹介する。

「御承知の外骨翁雪冤祝賀会は来る十一日午後正三時より正六時までの間日比谷公園松本楼に於て開催可致候間同刻迄に御出席被下度候

会費 御一人金二円五十銭（当日御持参）

追て当日外骨翁より御礼に石川島土産としてモツソー飯一碗を呈する筈に候<sup>①</sup>

この案内状には、祝賀会の発起人として、尾佐竹猛と長尾折三の二人が記されている。尾佐竹は現役の大審院判事、長尾は藻城と号し『医文学』誌の主宰者であった。外骨と尾佐竹は明治文化研究会の同人であり、外骨と長尾はともに香川県の出身で竹馬の友という間柄である。外骨自身は、この祝賀会は長尾が発起し尾佐竹が賛同したと記しているが、外骨の筆禍雪冤は尾佐竹のある発見によるものであった。このことは、のちに述べる。

松本楼での宴会には、「石川島土産」と銘打って「モツソー飯」が用意されていた。石川島とは石川島監獄のこと、外骨は明治二十二（一八七九）年から三年間そこに収監されていた。もっそう飯とは監獄で供される飯のことで、物相<sup>もつさう</sup>という曲げ物に盛られていたからとか、麦飯なのでもそもそしているからそう呼ばれたとされる。外骨はかつての獄中生活を思い出し、そのお相伴にあずかってもらうために、来客にもっそう飯を進呈しようとしたのである。

その実物の写真が、外骨発行の『公私月報』第五十号付録に載っている<sup>②</sup>。それによれば、杉などの薄材を円形に曲げて容器にしたものを、和紙で巾着状に包んで上部を紐で結んで、これに「もっさうめし」と書いた菱形の紙と、「メンスウ入」と書いた短冊形の紙が貼られている。面桶<sup>めんづく</sup>とは、やはり一人分の飯を入れる曲げ物のことである。さらに丸い紙が結びつけられており、表には横書きで「石川島」、縦書きで「みやげ」と書かれ、裏には鉄格子の内側から差し出された手と、外を飛ぶ鳥が描かれていた。手は囚人時代の外骨のものであろう。娑婆に憧れる気持ち<sup>③</sup>が端的に表現されている。

肝心のもっそう飯であるが、美食に慣れた皆さんの口には合わないだろうと、外骨は代わりに「お目出糖」とい

う菓子を入れた。小豆の漉し餡と甘納豆などを用いて、赤飯に擬した菓子のことだと思われる。<sup>(3)</sup> 本物のもっさう飯を期待して、がっかりした参会者もいたようである。

写真でしか想像できないのは残念だが、それにしても、「石川島土産」の外装といい中身といい、外骨の洒落心は相変わらず冴えている。外骨のこうした洒落心が、数多の滑稽雑誌を生み、ときには強烈な政治風刺となつて、数々の筆禍事件を起こしてきた。彼を石川島に迎えた筆禍事件こそは、その原点となつたものであつた。

同じ『公私月報』には、「当夜松本楼に於ける会衆の写真」も載っている。<sup>(4)</sup> 会場となつた広間に、外骨を真ん中に三列に並んでの記念写真である。とくに前列のほとんどが、手に手に「石川島土産」を持って写っているのがおかしい。外骨は、記念写真に収まつた三十四名はもとより、都合により写っていない来客の名前も記しているので、これによつて祝賀会参加者の全貌を知ることができる。以下にそのまま紹介しておこう。

(写真前列右から) 尾佐竹猛、竹森一則、白柳秀湖、小林一三、宮崎宣政、国分青厓、宮武外骨、長尾藻城、藤根常吉、石井研堂、篠田鑛造、藤本重太郎、上田恭輔

(中列右から) 西田長壽、永見徳太郎、秋山彌助、中山泰昌、永井幸一郎、今村力三郎、初谷豊作、岡崎三八、糸井仙之助、江見水蔭、柳田泉

(後列右から) 池内昇次、村上一儀、安西安固、上谷秀之助、衣川秀之助、鈴木氏亨、大島盛一、鈴木要吾、井上亀六、齋藤昌三

他に、所用のために途中で退出したりその他の理由によつて、写真に写っていない参加者が九名いた。律儀なこ

とに、外骨は彼らについても逐一名前を挙げている。

今井甚太郎、伊藤仁太郎、蛸原八郎、雑賀博愛、瀬木博尚、高島平三郎、藤井甚太郎、穂積重遠、(外一人)<sup>(5)</sup>

外骨の交際の広さを示す豪華な来客陣であるけれども、全員を紹介するわけにもいかなかったので、さしあたり当日の挨拶の中から何人かを紹介するに留める。他の参会者たちは、必要に応じて触れていこう。

まず伊藤仁太郎だが、彼は痴遊と号し自由民権運動のかつての闘士で、衆議院議員をやったり政治講談をやったりしていた。伊藤は外骨とは同年で同窓である。とはいっても、学校の同窓ではなく石川島の鉄窓とともにした監獄仲間であった。伊藤は挨拶に立って、「もッさう飯は健康の素である、外骨翁や私が今尚達者なのは、監獄のお蔭である」と述べた。

もう一人の発起人の大審院判事尾佐竹猛は、当日所用のため遅れて参会したが、そもそも雪冤祝賀会のきっかけとなった当該文書の発見について語った。この経緯のちに詳論する。尾佐竹は、「外骨が大阪に居た時代より文通した外骨ファンであり、近年は明治文化研究会で倍々懇親を深くして居る」。

東京帝国大学教授の法学者穂積重遠の挨拶。「翁が明治文庫に勤務されることは、誠に適材適所と申すべく、打って付けの仕事であります、私はたゞ上置きに過ぎません、最初大学の方から『外骨翁は公私を混合されるから、お前がブレーキをかけろ』と云はれましたが、別にそんな必要のない所を見ますと、翁も大分官僚式に成られたやうです」。「明治文庫」や『公私月報』そのものについても、あらためて説明する。

さて、雪冤祝賀会がおこなわれた数日後の十月十五日付で、外骨は出席者に対して「礼状を兼ねた」印刷物を送

付した。ただの礼状で終わらないところが外骨流で、これを機に「雪冤記念運動」を起こすことを宣言している。

すなわち、新聞雑誌発行保証金制度全廃運動と、第三種郵便物認可制度改正案運動をおこなうというのである。生涯に百種類を優に越える新聞や雑誌を発行しつつ、その多くを郵送方式に頼っていた外骨にとって、保証金納付制度や第三種郵便物認可制度は、憲法が保障する言論の自由と矛盾する悪法にほかならなかった。

その正当性を縷々述べたうえで、外骨はこう付け加えている。「就ては其経過報告を載せんがため、歴史学雑誌たる『公私月報』を有保証金(千円)雑誌として、第五十号以下の付録に続出する事にいたしました」と。この礼状の全文が『公私月報』五十号の付録として転載され、そこで新聞雑誌発行保証金制度の廃止を訴えながら、『公私月報』そのものを新たな有保証金雑誌にしようとしているのである。建前上、学術雑誌であるはずの『公私月報』に、外骨は時事報道の要素を公然と盛り込もうとした。

さらに、外骨は「雪冤記念出版」を企画して、石川島監獄での獄中記を『鉄窓の月』と題して出版しようとした。だがこれは結局実現しなかったようである。『公私月報』の読者には、本来なら定価一円前後のところ、半額か無料で贈呈する予定であったのだが。

冒頭で「宮武外骨」と記してしまったので具合が悪いのだが、この当時までの外骨は、実は「麿姓外骨」とか「再生外骨」と名乗っていた。あえて宮武姓を用いなかったのは、家制度に抗してのことだという。ついにながら名の「外骨」のほうはれっきとした戸籍名である。もともと亀四郎といったが、亀は内肉外骨、つまり内の肉を外骨が包んでいるとの古説に接することで、亀の異名として外骨を自称し、戸籍名の変更までしてしまったのである。

やはり礼状の中で、雪冤記念に麿姓外骨を改正外骨に改名しようかなどと書いているが、こうした外骨の暴走

を、瀬木博尚はやりわりと諫めている。瀬木は広告取次業の博報堂社主であり、外骨との交際も長い。明治文庫の設立も、瀬木の寄付を基金とするものであった。もちろん、雪冤祝賀会にも出席していた。外骨自身の記すところによれば、瀬木は次のように外骨をたしなめたという。すなわち、「家族制度無視、民法違反の廃姓を唱へたのも、支配階級者に反抗した一態度に過ぎない、今回の雪冤記念として、不マヂメ不徹底の廃姓を止めモトの宮武外骨にお還りなさい」と。外骨は瀬木の忠告に素直にしたがって、以後「宮武外骨」の名前に戻ることを宣言した。さすがの外骨も、瀬木には頭が上がらない。

以上、『公私月報』五十号付録として併載された「外骨筆禍雪冤祝賀会」記事およびその関連記事に即して、祝賀会の様子と礼状の内容を中心に述べてきた。

ところで、そもそも雪冤祝賀会を催す機縁となった「雪冤」とはなんだったのか。さらにはその大本となった「冤罪」事件とはなんであったのか。外骨のいう冤罪事件について語るためには、大日本帝国憲法の発布にまで遡らなければならない。また、いわゆる雪冤のための証拠とされる一編の文書を紹介するためには、明治文化研究会や明治新聞雑誌文庫を介しての外骨の交友関係にまで立ち入らなければならない。それぞれ節をあらためて論じることにする。

## 二 大日本頓智研法

宮武外骨は、明治二十年四月に『頓智協会雑誌』を創刊した。月二回発行の滑稽記事や洒落記事を中心にした雑誌であって、必ずしも政治風刺を目的としたものではなかった。ところが、三十二年二月二十八日発行の第二十八

号に載せた「頓智研法発布式 付研法」と題する画と文において、筆禍事件を引き起こすことになる。

この明治二十二年の二月十一日に、大日本帝国憲法が発布された。東洋では最初の近代的憲法であった。当時わが国に滞在していたお雇いドイツ人のエルヴィン・ベルツは、前々日の九日の日記において、憲法発布直前の東京の様子を書き残している。「東京全市は、十一日の憲法発布をひかえてその準備のため、言語に絶した騒ぎを演じている。到るところ、奉祝門、照<sup>イルミネーション</sup>明、行列の計画。だが、こっけいなことには、誰も憲法の内容をご存じないのだ」<sup>(8)</sup>。

たしかに、伊藤博文のもと、憲法の制定は国民に対して秘密裡におこなわれた。もちろん発布後は国民に知られることになったのだが、それでも多くの国民は憲法のなんたるかを知らなかったわけで、内容に即しての反応はきわめて鈍い。

そこには、民権派の多くが憲法発布に先立って東京から追放されていた、という事情もあるだろう。直接には条約改正問題に関わる反政府運動に対して、政府は明治二十年の年末に突如保安条例を発布し、民権派の主立った指導者や闘士をことごとく逮捕したり追放したりしていたからである。中江兆民も追放組の一人であった。

大阪に居を落ち着け『東雲新聞』を発行していた兆民は、憲法の発布に際して、以下のような感想を漏らしたという。大阪で兆民に師事した幸徳秋水の証言である。

「明治二十二年春、憲法発布せらるゝ、全国の民歓呼沸くが如し。先生嘆じて曰く、吾人賜与せらるゝの憲法果して如何の物乎、玉耶將た瓦耶、未だ其実を見るに及ばずして、先づ其名に酔ふ、我國民の愚にして狂なる、何ぞ如此くなるやと。憲法の全文到達するに及んで、先生通読一編唯だ苦笑する耳」<sup>(9)</sup>。

兆民もベルツと同様に、憲法の内容を知らない国民が大騒ぎしている、と皮肉っている。けれども、憲法の全文を手に入れたあとも、兆民は苦笑するだけで何もしなかった。むしろ彼は、憲法発布によって利益を得たともいえる。これを祝って国事犯に対する恩赦(大赦)が発令され、兆民たちの追放が一斉に解除されたからである。彼らの民権は「恩賜」的に「快復」された。

ところが、兆民とは反対に、憲法の発布によって自由を剝奪された操觚者<sup>ジョーグラー</sup>がいた。それが宮武外骨であった。

外骨は、憲法発布の直後に『東京日日新聞』の記事によって、その全文を知った。もしかすると、大阪で兆民が読んだのと同じ記事であったかもしれない。兆民はそれを読んで苦笑するのみであったが、外骨は頓智を効かして憲法のパロディを作成した。<sup>(19)</sup>そしてこれを『頓智協会雑誌』に載せたのである。比較のために、以下に憲法の原文と外骨によるパロディの全文を併せて紹介する。

まずは、憲法発布勅語ならぬ「研法発布囃語」である。「研法」はもちろん憲法に通じるのではあるが、建前上は頓智協会の会則という形式を採っていた。「囃語<sup>げいご</sup>」とは、うわごと、ねごと、たわごと、といった意味である。

#### 大日本帝国憲法発布ノ勅語

朕国家ノ隆昌ト臣民ノ慶福トヲ以テ中心ノ欣榮トシ  
朕カ祖宗ニ承クルノ大権ニ依リ現在及将来ノ臣民ニ  
対シ此ノ不磨ノ大典ヲ宣布ス

惟フニ我カ祖我カ宗我カ臣民祖先ノ協力輔翼ニ倚リ  
我カ帝国ヲ肇造シ以テ無窮ニ垂レタリ此レ我カ神聖

#### 研法発布囃語

余協会ノ隆昌ト会員ノ幸福トヲ以テ無上ノ榮誉トシ  
余ガ偶然ニ出ヅルノ意見ニ依リ現在及将来ノ会員ニ  
対シ此ノ不完ノ条規ヲ発布ス

惟フニ我ガ会我ガ誌ハ我ガ会員諸氏ノ協力輔翼ニ倚  
リ我ガ頓智ヲ発揚シ以テ無窮ニ垂レタリ此レ我ガ特



ナル祖宗ノ威徳ト並ニ臣民ノ忠実勇武ニシテ国ヲ愛シ公ニ殉ヒ以テ此ノ光輝アル国史ノ成跡ヲ胎シタルナリ朕我カ臣民ハ即チ祖宗ノ忠良ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ其ノ朕カ意ヲ奉体シ朕カ事ヲ奨励シ相与ニ和衷協同シ益々我カ帝国ノ光榮ヲ中外ニ宣揚シ祖宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシムルノ希望ヲ同クシ此ノ負担ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハサルナリ

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ万世一系ノ帝位ヲ踐ミ朕カ親愛スル所ノ臣民ハ即チ朕カ祖宗ノ惠撫滋養シタマヒシ所ノ臣民ナルヲ念ヒ其ノ康福ヲ増進シ其ノ懿徳良能ヲ發達セシMEMコトヲ願ヒ又其ノ翼賛ニ依リ与ニ俱ニ国家ノ進運ヲ扶持セムコトヲ望ミ乃チ明治十四年十月十二日ノ詔命ヲ履踐シ茲ニ大憲ヲ制定シ朕カ率由スル所ヲ示シ朕カ後嗣及臣民及臣民ノ子孫タル者ヲシテ永遠ニ循行スル所ヲ知ラシム

国家統治ノ大權ハ朕カ之ヲ祖宗ニ承ケテ之ヲ子孫ニ伝フル所ナリ朕及朕カ子孫ハ将来此ノ憲法ノ条章ニ循ヒ之ヲ行フコトヲ愆ラサルヘシ

性ナル頼智ノ美德ト並ニ會員ノ鋭敏俊秀ニシテ会ヲ愛シ大ニ勤メ以テ此ノ光輝アル頼智ノ効益ヲ顯シタルナリ余我ガ會員ハ即チ日本ノ親愛ナル同胞ノ兄弟ナルヲ回想シ其ノ余ガ意ヲ賛成シ余ガ事ヲ奨励シ相与ニ和衷協同シ益々我ガ協会ノ光榮ヲ中外ニ發揚シ會主ノ事業ヲ永久ニ鞏固ナラシムルノ希望ヲ同クシ此ノ負担ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハザルナリ

余物主ノ命令ヲ承ケ協会々主ノ上位ヲ踐ミ余ガ親愛スル所ノ會員ハ即チ物主ノ親愛シタマフ所ノ人物ナルヲ念ヒ其幸福ヲ増進シ其ノ善智良能ヲ發達セシムルコトヲ願ヒ又其ノ翼賛ニ依リ与ニ俱ニ頼智ノ進運ヲ扶持セシムルコトヲ望ミ乃チ明治十八年四月十五日ノ發意ヲ固守シ茲ニ大研ヲ制定シ余ガ率由スル所ヲ示シ余ガ後嗣及會員及會員ノ子孫タル者ヲシテ永遠ニ実行スル所ヲ知ラシム

頼智統轄ノ大權ハ余ガ此ヲ物主ニ承ケテ之ヲ子孫ニ伝フル所ナリ余及余ガ子孫ハ将来此ノ研法ノ条章ニ循ヒ之ヲ行フコトヲ愆ラザルベシ

朕ハ我カ臣民ノ權利及財産ノ安全ヲ貴重シ及之ヲ保護シ此ノ憲法及法律ノ範圍内ニ於テ其ノ享有ヲ完全ナラシムベキコトヲ宣言ス

帝國議會ハ明治二十三年ヲ以テ之ヲ召集シ議會開会ノ時ヲ以テ此ノ憲法ヲシテ有効ナラシムルノ期トスヘシ

將來若此ノ憲法ノ或ル條章ヲ改定スルノ必要ナル時宜ヲ見ルニ至ラハ朕及朕カ繼續ノ子孫ハ發議ノ權ヲ執リ之ヲ議會ニ付シ議會ハ此ノ憲法ニ定メタル要件ニ依リ之ヲ議決スルノ外朕カ子孫及臣民ハ敢テ之カ紛更ヲ試ミルコトヲ得サルヘシ

朕力在廷ノ大臣ハ朕力為ニ此ノ憲法ヲ試行スルノ責ニ任スヘク朕カ現在及將來ノ臣民ハ此ノ憲法ニ對シ永遠ニ從順ノ義務ヲ負フヘシ

御名御璽

明治二十二年二月十一日

内閣總理大臣 伯爵 黒田清隆

余ハ我ガ會員ノ權利及才智ノ完全ヲ貴重シ及之ヲ保護シ此ノ研法及規則ノ範圍内ニ於テ其ノ享有ヲ完全ナラシムベキコトヲ廣告ス

頓智研法ハ明治二十二年ヲ以テ之ヲ發布シ雜誌到着ノ時ヲ以テ此ノ研法ヲシテ有効ナラシムルノ期トナスベシ

將來若此ノ研法ノ或ル條章ヲ改定スルノ必要ナル時宜ヲ見ルニ至ラバ余及余ガ繼續ノ子孫ハ發議ノ權ヲ執リ之ヲ會議ニ付シ會議ハ此ノ研法ニ定メタル要件ニ依リ之ヲ議決スルノ外余ガ子孫及會員ハ敢テ之ガ紛更ヲ試ミルコトヲ得ザルベシ

余ガ在役ノ會員ハ余ガ為メニ此ノ研法ヲ実行スルノ責ニ任スベク余ガ現在及將來ノ會員ハ此ノ研法ニ對シ永遠ニ從順ノ義務ヲ負フベシ

宮武外骨

明治二十二年二月二十二日

東京 會員 五湖散史

枢密院議長	伯爵	伊藤博文
外務大臣	伯爵	大隈重信
海軍大臣	伯爵	西郷従道
農商務大臣	伯爵	井上馨
司法大臣	伯爵	山田顕義
大蔵大臣	伯爵	松方正義
兼内務大臣		
陸軍大臣	伯爵	大山巖
文部大臣	子爵	森有礼
逓信大臣	子爵	榎本武揚

東京	会員	夢遊居士
東京	会員	赤川瓢々生
讃岐	会員	熊阪流石生
東京	会員	黒白道人
近江	会員	梅村告天子
東京	会員	根本独醉生
東京	会員	安達吟光
越前	会員	傾斗醉生
伊勢	会員	豪気堂大空 <sup>(1)</sup>

比較すれば一目瞭然であるけれども、外骨は勅語の一字一句についてこれを揶揄している。それは、「不完ノ大典」を「不完ノ条規」、「御名御璽」を「宮武外骨」、副書の大臣名を頓智協会の会員名に書き換えたばかりでなく、字数までをほとんど揃えるなど、まことに徹底したものであった。憲法の発布は二月十一日の紀元節に合わせおこなわれたのだが、外骨は研法の発布を二月二十二日として、ここでも数を揃えている。なお、頓智協会の会員名は雑誌投稿者の筆名を並べたものだが、その中には安達吟光のように、この筆禍事件において外骨のよき共犯者となつた者もいる。

外骨は研法発布囃語につづけて、憲法の本文までパロディーにした。これも同様に、対応する原文と比較しながら

ら掲げておこう。

## 大日本帝国憲法

### 第一章 天皇

第一条 大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス

第二条 皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇男子孫

之ヲ繼承ス

第三条 天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス

第四条 天皇ハ国ノ元首ニシテ統治權ヲ総攬シ此ノ

憲法ノ条規ニ依リ之ヲ行フ

第五条 天皇ハ帝国議會ノ協賛ヲ以テ立法權ヲ行フ

第六条 天皇ハ法律ヲ裁可シ其ノ公布及執行ヲ命ス

第七条 天皇ハ帝国議會ヲ召集シ其ノ開會閉會停會

及衆議院ノ解散ヲ命ス

第八条 天皇ハ公共ノ安全ヲ保持シ又ハ其ノ災厄ヲ

避クル為緊急ノ必要ニ由リ帝国議會閉會ノ場合ニ

於テ法律ニ代ルヘキ勅令ヲ発ス

此ノ勅令ハ次ノ会期ニ於テ帝国議會ニ提出スヘシ

## 大日本頓智研法

### 第一章 会主

第一条 大頓智協會ハ讃岐平民ノ外骨之ヲ統轄ス

第二条 会主ハ頓狂博士ノ定ムル所ニ依リ外骨ノ子

孫之ヲ繼承ス

第三条 会主ハ尊重ニシテ侮ルベカラズ

第四条 会主ハ会ノ統領ニシテ頓智權ヲ総攬シ此ノ

研法ノ条規ニヨリ之ヲ行フ

第五条 会主ハ協會々員ノ協議ヲ以テ定則權ヲ行フ

第六条 会主ハ規則ヲ制定シ其公布及実行ヲ命ズ

第七条 会主ハ協會々員ヲ召集シ其討論會演說會談

話會及協議場ヘ出席ヲ促ス

第八条 会主ハ會員ノ安全ヲ希望シ又ハ其災厄ヲ避

クルタメ緊急ノ必要ニ由リ協會雜誌発行ノ毎号ニ

於テ靜謐ヲ図ルベキ論談ヲ載ス此論談ハ次ノ発行

ニ於テ是非曲直ヲ提出スベシ若會員ニ於テ不服ナ

若議會ニ於テ承諾セサルトキハ政府ハ将来ニ向テ  
其ノ効力ヲ失フコトヲ公布スヘシ

第二章 臣民權利義務

第十八条 日本臣民タルノ要件ハ法律ノ定ムル所ニ  
依ル

第十九条 日本臣民ハ法律命令ノ定ムル所ノ資格ニ  
応シ均ク文武官ニ任セラレ及其ノ他ノ公務ニ就ク  
コトヲ得

第二十条 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ兵役ノ  
義務ヲ有ス

第二十一条 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ納税  
ノ義務ヲ有ス

ルトキハ会主ハ将来ニ向テ其ノ本意ノ錯リナルコト  
ヲ公告スベシ

第二章 會員權利義務

第九条 協会々員タルノ要件ハ規則ノ定ムル所ニ依  
ル

第十条 協会々員ハ規則條例ノ定ムル所ノ資格ニ応  
ジ均ク役員ニ任ゼラレ及其ノ他ノ事務ニ就クコト  
ヲ得

第十一条 協会々員ハ規則ニ定ムル所ニ從ヒ投書ノ  
義務ヲ有ス

第十二条 協会々員ハ規則ニ定ムル所ニ從ヒ出費ノ  
義務ヲ有ス

(以下ハ第壹千号ニ載ス)<sup>(12)</sup>

「研法」本文においても、字数をほぼ揃えながら逐語的に茶化している姿勢は変わらない。憲法本文の「天皇」に対して「会主」とあるのは、いうまでもなく頓智協会を主宰する外骨自身を指している。第一条の「万世一系ノ天皇」に対する「讃岐平民ノ外骨」なる表現も、物議を醸さないではおかないだろう。各条文について逐一検討するわけにもいかないが、囃語部分に比べて本文部分は、全体としてはたしかに頓智協会の会則の体裁にはなってい

る。しかしながら、問題は、それがあえて大日本帝国憲法本文のパロディーとして書かれていることである。そのこと自体が、憲法発布の祝賀ムードに冷水を浴びせることになった。

### 三 石川島監獄

さて、「研法」ではなく「憲法」のほうであるが、二月十一日には、皇居で憲法発布式が厳粛に執り行われた。ベルツは当日の式典に招待され、これについても日記に詳しく記している。

#### 「本日憲法発布」

天皇の前には、やや左方に向って諸大臣、高官が整列し、そのうしろは貴族で、そのなかに、維新がなければ立場をかえて現在將軍であったはずの徳川亀之助氏や、ただ一人（洋服姿でいながら）なお真正正銘の旧い日本のまげをつけているサツマの島津侯を認めた。珍妙な光景だ！ 天皇の右方は外交団。広間の周囲の歩廊は、他の高官連や多数の外人のため開放されている。皇后は、内親王がたや女官たちと共に、あとより続かれた。長いすそをひく、バラ色の洋装をしておられた。すると、玉座の左右から、それぞれ一人の大官が一つずつ巻物を持って進み出たが、その一人はもとの太政大臣三条公だった。公の手にあった方が憲法である。他方の巻物を天皇は手に取ってお開きになり、声高らかに読み上げられた。それは、かねて約束の憲法を自発的に国民に与える決定を述べたものであった。次いで天皇は、憲法の原本を黒田首相に授けられたが、首相はこれを最敬礼で受取った。それが終ると、天皇は会釈され、皇后やお付きのものを従えて、広間を出ていかれた。式は、わずか十

分間ばかりで全部終了した」<sup>(13)</sup>

天皇が総理大臣に憲法を手渡し、総理大臣がこれを最敬礼で受け取るという、まさに憲法発布式典の最高潮の場面であるが、外骨はこの式典をもパロディーにしてしまった。『頓智協会雑誌』の二十八号には、先に紹介した「研法発布囃語」と「大日本頓智研法」に加えて、「骸骨」が研法を下賜する様子を銅版画にして載せたのである。

その画は次のようなものであった。すなわち、大広間の一段高くなった台上に何もまとわない裸の骸骨が立っている。画の端つまりお立ち台の前には、九名の参列者が見える。全員が大礼服のようなものを着ている。骸骨の右方には洋装の高貴な女性が描かれ、その後ろにお付きの女性が控えている。骸骨の左方にも、骸骨の側と参列者の側に一人ずつ、やはりお付きの者が控えている。彼らに取り巻かれるような位置には、参列者から進み出た体の大礼服の男性が描かれている。お立ち台上の裸の骸骨とその前に進み出た大礼服の男とが、明らかに構図の中心になっている。骸骨は右手に巻物を持ち、これを男に今まさに手渡そうとしている。男は最敬礼をしながら、この巻物を両手で押し戴こうとしている。<sup>(14)</sup>

これは誰が見ても、憲法下賜の場面のパロディーにはかならない。お立ち台の「骸骨」は「外骨」にはかならず、したがって頓智協会主宰の外骨が会員に大日本頓智研法を授ける場面だと逃げ道を用意したとしても、玉座の天皇が総理大臣黒田清隆に対して大日本帝国憲法を下賜する様子を連想させずにはおかないからである。画工は安達吟光であり、囃語の副書部分に大臣たちに代わって名前を出している。

憲法発布勅語の「御名御璽」に代えて「宮武外骨」とある以上、これ自身が不敬だと受け止められても仕方がないし、こともあろうに玉座の天皇を裸の骸骨として描いたとすれば、これ以上にならない不吉なこととして大不敬の誹

りを免れないだろう。

実際、事態はそうに進展した。当該の文章と画を載せた『頓智協会雑誌』二十八号は、二月二十八日に発行されたが、早速三月四日に発行停止および発売禁止の命令を受け、外骨は翌五日に東京輕罪裁判所の検事局に召喚された。七日には鍛冶橋監獄に拘留され、八日に予審がおこなわれた。同裁判所において四月二十二日に裁判がおこなわれ、即日結審した。判決宣告は二十五日。翌二十六日付の『朝野新聞』は、当該判決についてこう伝えている。

「不敬罪事件宣告 頓智協会編集人兼発行人宮武外骨氏画工吟光事足立平七氏印刷人徳山鳳洲氏等は明治二十二年二月二十八日発行に係る第二十八号插画欄内へ同年同月十一日宮城に於て行はせられたる憲法発布式場に模擬し其正面玉座の上に骸骨を図したる等は天皇に対し不敬の処為なりとて昨日東京輕罪裁判所にて宮武氏は刑法第百七十七条第百二十条に照し重禁錮三年罰金百円監視一年に足立氏は同一年同五十円同八ヶ月に徳山氏は同十ヶ月同三十円同六ヶ月に処せられたり尚ほ三氏共控訴するよし」<sup>(15)</sup>

句読点のない文章なので読みにくいけれども、要は、発行人の外骨のほか、画工の安達吟光と署名印刷人の徳山鳳洲も、ともに不敬罪に問われたということである。また、問題となったのは、研法の嚙語や本文部分というよりは、「憲法発布式場に模擬し其正面玉座の上に骸骨を図した」ことのほうにあったようだ。すなわち、天皇を骸骨の姿で描いたことが、不敬罪に該当するものである。少なくとも司法当局は、文字的表现よりも図像的表现のほうにはるかに衝撃を受けて反応した。ちなみに旧刑法一一七条一項には、「天皇三后皇太子ニ対シ不敬ノ所為ア



ル者ハ三月以上五年以下ノ重禁錮ニ処シ二十円以上二百円以下ノ罰金ヲ付加ス」と記されていた。また百二十条には、「此章ニ記載シタル罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ処スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付ス」とあった。外骨らは、この二つの条文によって処断されたわけである。

外骨たち三人はただちに東京控訴院に控訴したが、原審の判断を取り消すべき事由なしとして退けられた。さらに大審院に上告した。上告の理由は、①骸骨の画は外骨の寓意であって天皇への悪意を含むものではないこと、②頼智研法発布式の画と研法発布囃語は憲法発布への祝意を表したものであること、③すでに新聞紙条例による処分は解除されたので不敬罪も成立しないこと、④事前に警視第三局より不敬罪には当たらないとの内示があったので発行したこと、の四点であった。<sup>(16)</sup>

不敬罪の存在を前提とするならば、外骨側の主張のほとんどは分が悪い。第一の点については、主観的に悪意はなかったということと玉座の骸骨の客観的な意味とは別問題である。第二の点も同様である。第三の点については、新聞紙条例による行政的処分と不敬罪という刑法上の犯罪の成立も別問題である。第四の点については、警視庁当局は不敬罪には該当しないとの予断を示したとのことで、なんとか弁解の余地が残りそうである。しかしこれも、外骨が事前に当局者に示したのは文章部分だけであって、寓意画については見せていないのである。ところが、裁判で主として問題になったのは文字よりも画のほうであった。外骨には気の毒だが、あの強烈な印象を残す寓意画を掲げたとあっては、不敬の誹りを免れることはできない。

明治二十二年十月二十五日に下された大審院の判決は、原審とまったく同じものであった。外骨は検事局に召喚されて以来、未決囚として鍛冶橋監獄に収監されていたが、判決が確定したので石川島監獄に移送されることになった。隅田川河口に位置する石川島には、江戸時代寛政期に人足寄場が設けられていたが、明治政府はここに監

獄を建設して、政治犯などを収容していた。

明治二十年末の保安条例によって、十二月二十六日の夜、民権派の多くが東京からの退去命令を受けた。その中には、中江篤介つまり兆民のほかに、星亨、片岡健吉の名前も含まれていた。このうち、中江兆民と星亨は退去に応じたが、片岡健吉はこれを拒み、軽禁錮三年に処せられた。片岡は同じく退去を拒んだ同志とともに、石川島監獄に送られた。<sup>(17)</sup>

退去命令により中江兆民が大阪に退いたところ、星亨は横浜に移っていた。アメリカへの渡航を予定していたところ、明治二十一年二月二十五日の未明に横須賀で拘引された。憲法制定に関わる一連の秘密出版事件、いわゆる『西哲夢物語』事件等の首謀者と目されたゆえであった。星は東京軽罪裁判所より、軽禁錮一年十ヶ月罰金五円に処せられた。彼もまた、石川島監獄に繋がることになった。この事件には、伊藤仁太郎も連座している。<sup>(18)</sup>

片岡健吉や星亨にかぎらず、出版条例や保安条例違反で入獄する自由党員は多く、しかもそのほとんどが石川島監獄に送られて、その数は三十名ほどになったという。当時は「一棟全房党員充滿し、ために一廓を成すに至り、〔あたかも自由党幹部を獄内に遷徙せるの觀〕を呈していた」<sup>(19)</sup>。まるで、自由党本部そのものが石川島監獄に移ってきたかのようだ、というのだ。もっとも、政府の弾圧を避けるべく自由党はすでに明治十七年の十月末に解党しており、星を中心とした再建運動はまだ効果を挙げていなかったから、厳密には旧自由党というべきなのだが。

ところが、明治二十二年の二月十一日、紀元節の日に憲法が發布されるにともない、民権派は天皇の恩赦によって一斉に罪を赦された。獄外にいた中江兆民の追放も解除されたし、石川島にいた片岡健吉も星亨も釈放されたのである。保安条例は条約改正への反対運動を弾圧することが目的とされたが、結果からみれば、むしろ憲法制定を

円滑におこなうための予防的措置であつたことがわかる。しかもその憲法は、意外にも近代的なものであり、民権派も含めて、公然たる批判もみられないままに明治社会に受け入れられた。

発布された帝国憲法にただちに反応しえたのは、唯一、外骨の頓智研法のみであつた。もちろん、「研法」は「憲法」の対案とはいえない。若い外骨にはいまだ風刺といえるまでの思想もなく、単なるお遊びの所為であつたのかもしれない。しかし政府にとって、玉座の骸骨の画はあまりにも衝撃的なものであつた。外骨は出版条例や保安条例ではなく、妙な言い方だが、歴とした不敬罪を適用されて石川島に入獄した。彼の刑罰は民権派の誰よりも重く、重禁錮三年という堂々たるものであつた。

明治二十二年十月二十五日、外骨は石川島監獄に収容された。彼の居室は、十二番檻の第六房であつた。なんと、八か月前まで片岡と星が入っていた由緒ある房である。単なる偶然といえはそれまでだが、憲法の発布により釈放された者と研法の発布により迎えられた者とが入れ替わつたことになる。監獄では刑期の重いほうが偉いのだらうから、操觚者の外骨は自由党大幹部の片岡や星より格上ということになる。実際そのこともあってか、外骨は石川島では丁重に扱われた。「独りでは淋しいでせう」と、署長の好意で安達吟光と徳山鳳洲を一緒の房に入れてくれたのもその一例である。

外骨の監獄生活は、それなりに充実していたようにみえる。石川島監獄では、東本願寺発行の宗教雑誌『法話』<sup>ののはなし</sup>の印刷をおこなっていたが、外骨はその校正作業を引き受けた。そしてそのかたわら、獄中での秘密出版を計画した。これには安達吟光と徳山鳳洲ばかりでなく、民権派の伊藤仁太郎も協力した。まことに懲りない面々である。伊藤仁太郎は西哲夢物語事件では微罪で入獄を免れたものの、別の事件で外骨の「同窓」になっていた。外骨と伊藤の親交は、石川島での秘密出版を契機に終生続くことになる。

外骨らはまずは試しにと、「哀訴裁判宣告書謄本下付再願」を印刷してみた。大審院に対して、例の筆禍事件の判決文(宣告文)謄本を請求するという趣旨である。外骨は大審院の判決が出る以前、すでに鍛冶橋監獄から大審院に再審願いを出していたが、あらためて判決文の交付を願うという体裁であった。しかしながら、実際の内容は各審級の判事たちや司法大臣への不満、というより罵詈雑言を連ねた強烈な文章である。明治二十三年一月三十日付で大審院書記局に宛てた文面から、比較的穏やかな個所のみ摘記してみる。

「斯カル屁馬<sup>へま</sup>ノ人物ガ<sup>てんざん</sup>颯然<sup>てんざん</sup>大面ヲ構ヘテ勿体ナクモ司法ノ要地ナル大審院ノ判事ナゾトハ実ニ片腹痛クモ呆キレ果タル次第ナリソレニアノ伊藤博文ノ強姦不遂罪ノ如キハ兎ニ角彼ノ森有礼ノ不敬罪犯ノ如キハ世間中一人トシテ知ラヌ者ナキ程ナルニ日本ノ法官中ニハ誰トテ之ヲ審判スル者ナク<sup>た</sup>啻ニ黙々ニ付シタメニ西野某氏ヲシテ之を暗殺セシムルニ至ラシメタルナリ蘇老泉ノ管仲論ニハアラネド其暗殺ニ至リテハ我レ西野某ト云ハズシテ日本ノ法官ガ刑法ナリ治罪法ノ明文ニヨリテ森ヲ拘留ノ上相当ノ裁判ヲ下シテ三年ナリ五年ノ重禁錮ニ処シタランニハ何ゾ西野某氏ガ暗殺ノ暴挙ニ及ブコトヲセンヤ嗚呼罪深キハ日本ノ法官連中ナリ」<sup>(2)</sup>

憲法発布の当日、文部大臣森有礼は「西野某氏」により暗殺された。森が伊勢神宮に参拝した際、神体に対し無礼があったというのが西野の言い分であった。不敬罪に問われるべきは、憲法発布勅語に副署したにもかかわらず、天皇主宰の発布式に出席できなかった森有礼大臣のほうであり、もし森を不敬罪に問うていれば暗殺もなかっただろう。外骨はこうに述べて、自身を罪に問い森を問わなかった司法の怠慢を罵倒する。

管仲についての言及はともかく、外骨は伊藤博文の強姦未(不)遂についても触れている。伊藤は初代の総理大

臣であったが、明治二十年四月二十日に首相官邸で仮装舞踏会（ファンシーボール）を開いた。<sup>(22)</sup> その晩、伊藤と華族夫人のあいだで一悶着があった、という噂を取り上げているのだ。憲法発布の当時、伊藤は総理大臣の座こそ黒田清隆に譲って自らは枢密院議長に退いていたが、そもそも憲法を制定したのはその伊藤博文であった。

とはいえ、外骨の「哀訴裁判宣告書謄本下付再願」は、実際には大審院に提出されていない。さらなる処罰を恐れたというよりは、始めから試し刷りとして一部の獄中仲間だけで読まれたものであろう。これを皮切りに、外骨は『鉄窓詞林』という獄中の文芸誌を企画して、その発行広告さえ印刷した。さすがに発行にいたらずに露見してしまったが、外骨の操觚者としての生涯は、むしろ石川島監獄の中ですます強固かつ頑固に形成されていた。頓智研法の筆禍事件は、外骨にとってその決定的な出発点となったのである。

#### 四 秘書類纂

石川島監獄に収容されたとき、外骨はまだ二十二歳の青年であった。すでに雑誌や著作を出していたとはいえ、操觚者としては様々に未熟な点を残していた。反権力、反官憲の姿勢はよしとしても、操觚者として必要な思想も信念もいまだ不足していたのではないだろうか。皮肉なことではあるけれども、むしろ三年間の石川島生活そのものが、外骨を一段と成長させたようにみえる。民権運動の闘士とともに企てた獄中の秘密出版などは、外骨の人間的なつながりを豊かにしたし、操觚者として生きる決意をあらためて確認するものであった。

さすがに出版こそできなかったが、外骨は実際に印刷した「哀訴裁判宣告書謄本下付再願」と『鉄窓詞林』の発行広告をはじめ、その他の書類や春画・鏡・鉛筆などの作品を密かに獄外に持ち出した。そしてほとぼりが冷めた

と判断したのだろうか、大正十二年には、これら思い出の品々を『獄中記念物』と題して貼付した手製本まで作成している。<sup>(23)</sup>

以下に引用するのは、明治二十四年二月二十五日付で実兄の宮武南海に宛てた手紙である。刑期をほぼ半分勤めあげたころのもので、石川島での外骨の勉強ぶりや仲間への気遣いなどがうかがえる。

「○御贈与ノ論理学書九冊心理書一冊ハ昨廿日正に頂戴仕候意外ノ恩賜イツモナガラ難有感涙ノ至リニ御座候  
(経世危玄ハ不認可ニ有之候)(中略)○昨年願置候哲学会雑誌ノ御差入ハ御見合せ可被下候(中略)徳山鳳洲ハ  
東洋新報社ニ在勤ノ由同人ヘハ暫ク無沙汰致居候ニ付宜敷御伝置可被下候○拙弟事本月上旬流行ノ風邪熱ノタメ  
四五日病檻入りト相成候ヘ共爾来ハ追々快氣ニ赴キ現今ハ殆ド全癒致居候○心理学書ノ類新ニ出版有之候節ハ如  
何ナルつまらぬモノニテモ残ラズ御贈与奉願候是レ望蜀ノ一ニ候謹言」<sup>(24)</sup>

具体的な書名がわからないこともあり、手当たりしだいという感もあるけれども、外骨は獄中で論理学と心理学を読み漁った。民権派の伊藤仁太郎などから影響を受けたのかもしれない。外骨にとって、石川島監獄は大学であった。また勉学的一方では、筆禍事件で連座した徳山鳳洲の出所後の生活を心配している。安達吟光もこの時期には出獄していたはずだが、その消息はわからない。外骨は一時風邪を引いて病棟入りしたものの、元気に官憲への恨みを募らせつつ、自身の出所を迎えた。

出獄後の外骨はますます意気軒昂で、生涯に刊行した新聞雑誌や著作の合計は優に二百五十を越えた。反権力魂も旺盛で、その後も筆禍事件をたびたび起こし、例の頓智研法事件を含めて、入獄四回四年、罰金刑十五回、発売

禁止・発行停止十四回の経歴を誇っている。その最初にして最大のものが、頓智研法にまつわる不敬事件であったということだ。

外骨は「反上抗官」つまり反権力を標榜したものの、反天皇の意識はまったくなかったようで、それだけに「不敬罪の内科者」という経歴は、大きな心の傷となっていた。冒頭に記した雪冤祝賀会での外骨のはしゃぎぶりは、その裏返し表現である。

外骨雪冤祝賀会を可能にしたのは、明治文化研究をめぐる人的交流の結果であった。それは互いに交錯しながらも、明治文化研究会と明治新聞雑誌文庫の二つの組織を軸にしている。そもそも明治文化の研究を組織的にこなす直接のきっかけになったのは、関東大震災による資料もしくは史料の大量焼失であった。

大正十二(一九二三)年九月一日に発生した大地震は、南関東地域を中心に膨大な死傷者を出したが、さらに膨大な家屋ならびに建造物を焼失させた。これにより、たとえば東京帝国大学教授の吉野作造は、大学研究室の火災により多くの書籍を失った。また大審院判事の尾佐竹猛も、自宅を焼け出されて蔵書や収集品を失った。宮武外骨にいたっては、余震を恐れて谷中の墓地で一夜を明かしたという<sup>(26)</sup>。

吉野も尾佐竹も外骨も、それぞれに明治期の政治や法や文化について研究していたが、大震災による資料や史料の散逸に危機感を抱き、期せずして組織的な研究の必要を感じた。こうして大正十三年十一月、「明治初期以来の社会万般の事相」を研究すべく、明治文化研究会が創立された。趣意書にしたがい発起人をイロハ順に挙げると、石井研堂、石川巖、井上和雄、尾佐竹猛、小野秀雄、吉野作造、(麿姓)外骨、藤井甚太郎の八名であった<sup>(26)</sup>。初代の会長は、吉野が引き受けた。同研究会の最大の業績として、『明治文化全集』全二十四巻の刊行が挙げられる。

もう一つ、明治新聞雑誌文庫の設立が挙げられる。外骨は、大正十三年二月以来、東京帝国大学法学部の嘱託と

なっていた。中田薫教授の推薦により、古文書管理等を任せられたのである。<sup>(27)</sup> すでにこのころから、法学部との人的関係ができていた。そこへ、博報堂(内外通信社)社長の瀬木博尚から外骨に対して、同社の創業三十五周年記念事業についての相談がもたらされた。外骨は明治期の新聞や雑誌の蒐集事業を提案し、瀬木も賛同して十五万円の寄付を約束した。当初は保管場所として帝国大学の総合図書館を希望したけれども、図書館側の反対もあり、結局外骨との縁で法学部に付置されることになった。とはいえ、実際の設置場所は図書館棟の地下である。管理者には法学部教授で外骨とも仲のいい穂積重遠が任じられ、外骨はその初代主任となった。大正十五年九月のことである。<sup>(28)</sup>

明治新聞雑誌文庫には、外骨自身が集めた大量の資料も持ち込まれた。見ようによっては、帝国大学図書館の地下に外骨が書庫付きで棲み込んだことになる。庇護者は、吉野作造、穂積重遠、中田薫らの法学部の教授たちであった。厳密に言えば、明治新聞雑誌文庫ができたときには、吉野は大学を退職して講師の身分になっていたけれども。

帝国大学構内に棲みついた外骨に、公私の区別はない。<sup>(29)</sup> 明治新聞雑誌文庫主任としての外骨は、「公務報告」を兼ねて「私見私事」を報道する雑誌として『公私月報』を刊行し、その中に「公私混合日記」という日報欄まで設けた。同雑誌の奥付によれば、編集兼発行者は「半狂堂(宮武)外骨」とあり、外骨の名の下には「是本名也」の角印が付されていた。半狂堂は外骨の個人出版元である。公私混合日記に外骨は臆面もなく個人的日常を記しているけれども、まさに彼の日常こそが明治文化研究の進捗を伝えるものであった。まことに公私混同も甚だしい。しかし、吉野や尾佐竹とともに、まさに外骨の個人的奮闘によって、明治文化研究会も明治新聞雑誌文庫も担われていた。



吉野作造は昭和八年に亡くなり、明治文化研究会の第二代会長には尾佐竹猛が就いていた。現職の大審院判事であった尾佐竹は、当時は『秘書類纂』の編集に携わっていた。すなわち、伊藤博文のもとにあった立法関連資料の整理である。昭和九年のある日、尾佐竹は井上毅作成の文書の中に外骨についての記述を見出した。「検察官並ニ警察官ノ弊害」と題され、なんと外骨の頓智研法筆禍事件に直接言及していた。

「其他出版条例等ノ違反罪被告人増加スル所以ハ、無智無責任ノ記者ガ其言論ヲ世ニ吐露スルモ実地治安上恐ルベキ者ニアラザルニ、其取調ヲ掌ル吏属其人ヲ得ザルガ為メ、事ヲ尊大ニ取り、為メニ謂ハレナキ獄ヲ起シ、到底政府ノ信用ヲ墜スヨリ他アラザルノ結果ヲ生ズルコト常ナルニ在リトス。其例ヲ挙グレバ頓智協會雑誌記者ガ不敬罪ヲ以テ告訴セラレタル事件ノ如キ、実ニ抱腹ニ堪ヘザルコト言ハザルヲ得ズ。就中始審裁判所ノ如キハ其弊害ノ最モ甚シキ者ナリ」<sup>(30)</sup>

文中の「頓智協會雑誌記者」が外骨を指していることは疑いない。『秘書類纂』そのものには日付の記載等はないものの、井上毅側の資料によれば、この文書は明治二十二年、つまり筆禍事件の際に書かれている。<sup>(31)</sup>内容は検察官や警察官よりも、むしろ裁判官の横暴ぶりを強く批判している。とくに予審判事の中には、自らの任務を治安の維持と考え、「被告人ニ向ッテ座右ノ物品ヲ投ジ甚シキハ自ラ坐ヲ下ッテ之ヲ毆打スル」者までいたという。<sup>(32)</sup>井上は、裁判権の独立は一国の文明度を表すものであって、憲法政治を貫くためにも条約改正を成功させるためにも不可欠だと主張する。ここで井上の開明性を指摘してもいいが、それよりも、民権派を抑えて治安の維持に成功し「憲法政治」を発信させた、法制局長官としての余裕の現れと解しておくべきなのだろう。

井上毅はきわめて有能な法制官僚であり、伊藤博文のもとで憲法の制定に尽力した当事者であった。天皇崇拜の念も人後に落ちなかった。この井上が、不敬罪で摘発された外骨を擁護しているかのように読める意見書を伊藤に提出した。

始審裁判所たる東京軽罪裁判所で、外骨は予審判事に物を投げつけられたり殴られたりしたのかもしれない。たしかに、外骨は「哀訴裁判宣告書謄本下付再願」の中で、実名を挙げて裁判官等を罵っている。あるいは、井上は『頓智協会雑誌』の秘かな購読者であったのかもしれない。彼の苦虫を噛みつぶしたような肖像画からすれば、まったく想像できないことではある。いずれも、今のところ確証はないのだが。

しかしながら、事件が発生した段階で、井上毅が大日本頓智研法と玉座の骸骨図を実際に見たことはほぼ間違いない。井上は自らが手がけた憲法と敬愛する天皇へのパロディを目の当たりにして、怒り心頭に達したどころか「抱腹」、文字どおりに解せば腹を抱えて笑った。井上の性格からして、それは一生で一度の大笑いであったかもしれない。彼が怒ったのは、外骨ではなく無粋な司法官憲のほうであった。

同様のことは、井上の意見書を読んだ伊藤博文にもいえる。伊藤は仮装舞踏会での醜聞報道にもビゴ<sup>(33)</sup>の風刺画にも、警察権を発動することはなかった。出所後の外骨も『滑稽雑誌』誌上で盛んに伊藤をからかったが、これに対しても報復措置はとっていない。それが権力者の度量というものであろう。

この井上毅文書は昭和九年になって、大審院判事の尾佐竹猛により発見された。尾佐竹はその旨を電話で外骨に伝え、当該井上文書の一部を書き抜いて外骨に贈った。尾佐竹は拘摸や賭博を好み、明治期の疑獄難獄事件に関心をもつ裁判官であった。<sup>(34)</sup> もしも尾佐竹が外骨の裁判を担当したとしたら、必ずや無罪判決を出したことであろう。

同様のことは同僚からも社会主義者からもいわれており、まさに裁判官にしておくには惜しい裁判官であった。尾

佐竹は昭和九年の当時は、吉野の亡き後を受けて明治文化研究会の第二代会長であった。そして吉野と同じく、大の外骨ファンであった。

先の井上文書は、明治文化研究会の尾佐竹猛によって発見されたことに意義がある。外骨はこれで不敬罪の冤が雪がれたと有頂天になり、勤務先の明治新聞雑誌文庫の関係者にもこのことを伝えた。その結果、明治文化研究会と明治新聞雑誌文庫を中心に、冒頭で紹介した雪冤祝賀会が企画されたのである。企画そのものといい、参集した顔ぶれといい、それは明治文化研究の成果にはかならなかった。外骨六十八歳、大日本頓智研法事件は、ここにようやく幕を閉じたのである。

注

- (1) 『公私月報』五十号付録、一九三四年十一月、一頁。吉野孝雄編『新編 予は危険人物なり——宮武外骨自叙伝——』ちくま文庫、一九九二年、一〇三頁参照。
- (2) 『公私月報』五十号付録、一頁。
- (3) 外骨がもつそう飯の代用と洒落た「お目出糖」は、万年堂本店の蒸し菓子「御目出糖」のことと思われる。同店には「亀屋和泉」の名称もあり商標も亀甲であり、外骨好みの菓子匠だったのではないか。
- (4) 同雑誌、三頁。
- (5) 「外一人」という表記も妙だが、発起人の長尾藻城の知人らしい。酒癖の悪い人物で、酔って騒いだので会場からつまみ出された。外骨は、あえて実名を記さず括弧の中に閉じこめることで、この不埒者に復讐している。
- (6) 『公私月報』五十号付録、四頁。
- (7) 同所。外骨の「麿姓」につき、吉野作造「外骨翁と私」、同『公人の常識』文化生活研究会、一九二五年、二一五頁以下をも参照。
- (8) トク・ベルツ編『ベルツの日記』上、菅沼竜太郎訳、岩波文庫、一九七九年、一三四頁。フランス人の諷刺漫画家ジョル

ジュ・ビゴも、『トバエ』四九号に、憲法発布当日に祝賀行列の先頭を行く奇妙な風体の日本人を描いている。清水勲編『続ビゴ日本素描集』岩波文庫、一九九二年、一五一頁参照。

(9) 幸徳秋水『兆民先生』岩波文庫、一九六〇年、十七頁以下。

(10) 外骨の法パロディの概要につき、堅田「学術論文・宮武外骨の法パロディ」『獨協法学』四八号、一九九九年、七七頁以下参照。

(11) 『頓智協会雑誌』二八号、一八七九年、二頁以下。吉野孝雄『宮武外骨』改訂版、河出文庫、一九九二年、三五頁以下。『頓智協会雑誌』の復刻版として、同監修『雑誌集成 宮武外骨此中にあり』四〇五巻、ゆまに書房、一九九三年参照。

(12) 『頓智協会雑誌』二八号、三頁。吉野孝雄『宮武外骨』三八頁以下参照。

「大日本頓智研法」本文は、第十二条で終わっており、「以下ハ第壹千号ニ載ス」とあるけれども、それは現実的ではないから、筆禍事件がなくてもこれ以上続けるつもりはなかったようである。

(13) 『ベルツの日記』上、一三四頁以下。

(14) 吉野孝雄『宮武外骨』三四頁。

(15) 同、四一頁以下。判決文の全文につき、木本至『評伝 宮武外骨』社会思想社、一九八四年、一一九頁以下参照。

(16) 同、四二頁以下。

(17) 板垣退助監修『自由党史』下、岩波文庫、一九五八年、三三八頁以下。

(18) 大日頓智研法ならぬ大日本帝国憲法の制定過程につき、堅田「西哲夢物語、あるいは明治憲法制定始末」、同『独逸学協会と明治法制』木鐸社、一九九九年、二五三頁以下。

伊藤痴遊(仁太郎)『巨人 星亨』忠誠堂、一九二五年、七〇二頁以下によれば、ここという秘密出版には、①条約改正に対するボワソナードの意見書、②憲法草案関連の『西哲夢物語』、③やはり条約改正に関連した谷干城・板垣退助・勝海舟・副島種臣等の意見書、の三種類があった。いずれも自由党员によるものであった。他に、『自由党史』下、三四五頁以下参照。

伊藤仁太郎は星亨に師事していたが、秘密出版の当時、神田猿樂町の東京学館という英学塾に「用心棒」として居候していた。東京学館には森鷗外も通ったことがある。ところで、その経営者は宮武南海といい、外骨の実兄であった。やがて伊藤は石川島監獄で外骨と運命的に出会い、獄中でも秘密出版に関わることになる。伊藤の『巨人 星亨』は講談調で、『自

由党史」の裏面史として読むと非常におもしろい。

- (19) 野沢雞一編『星亨とその時代』2、東洋文庫、一九八四年、一〇頁。中村菊男『星亨』吉川弘文館、一九六三年、七五頁以下参照。

- (20) 『公私月報』四五号、一九三四年六月、三頁。吉野孝雄『宮武外骨』四六頁。木本、前掲書、一三四頁以下も参照。  
ただし、野沢、前掲書、一〇一頁所載の十二番権略図によれば、星亨と片岡健吉の房は別であり、房の番号も確認できない。

- (21) 木本、前掲書、一四〇頁。吉野孝雄『宮武外骨』四八頁参照。

- (22) 伊藤博文の仮装舞踏会につき、堅田「明治二十年のファンシーボール——あるいは鹿鳴館外交の挫折について——」『獨協法学』六六号、二〇〇五年、一頁以下。

- (23) 吉野孝雄『宮武外骨』五一頁。

- (24) 同書、五一頁以下。

- (25) 尾佐竹は、当初分冊して出版する予定であった『賭博と掏摸の研究』の原稿を震災により焼失させた。堅田「尾佐竹猛と法の雑学——明治文化研究の一素描として——」『獨協法学』六八号、二〇〇六年、二二頁以下。外骨は、震災当日、中田黨の「徳川時代の文学と私法」の印刷につき業者と打ち合わせ中であつた。吉野孝雄編『新編 余は危険人物なり』四二二頁。

- (26) 吉野孝雄編『新編 余は危険人物なり』四九七頁以下。

- (27) 外骨と中田黨の交流も、吉野作造の仲介に端を発した。吉野作造「外骨翁と私」、二二七頁参照。

- (28) 文庫設立および運営の詳細については、西田長壽「明治新聞雑誌文庫の思い出」『レキエスタ』の会、二〇〇一年を参照。西田は同文庫で外骨の助手を務め、雪冤祝賀会にも事務方として出席している。

- (29) 外骨の「公私混合」については、穂積重遠も雪冤祝賀会の挨拶の中で述べている。「翁が明治文庫に勤務されることは、誠に適材適所と申すべく、打って付けの仕事であります。私はたゞ上置きに過ぎません。最初大学の方から『外骨翁は公私を混合されるから、お前がブレーキをかけろ』と云はれましたが、別にそんな必要のない所を見ますと、翁も大分官僚式になられたやうです」『公私月報』五十号付録、二頁。吉野孝雄編『新編 余は危険人物なり』一〇九頁以下参照。

(30) 伊藤博文編『秘書類纂 法制関係資料』上巻、復刻版、原書房、一九六九年、九四頁。「伊藤博文編」とあるが、校訂者は尾佐竹猛と平塚篤であった。ただし、原本でそう明記されているにもかかわらず、どういうわけか復刻版では尾佐竹の名前が削られている。木本、前掲書、五六六頁参照。

(31) 『井上毅伝 史料篇』第二、国学院大学図書館、一九六八年、七八頁以下。ただし表題は「検察官警察官弊害意見」となっており、井上の執筆とは断定していない。執筆時期についても推定に留まる。文面は句読点や濁点の有無を除けばほぼ同一。『秘書類纂』で「其例ヲ挙グレバ」とあるところ、『井上毅伝』では「其近例ヲ挙クレハ」とあるので、頓智研法事件の直後に書かれた感がさらに強い。国学院大学日本文化研究所編『梧陰文庫総目録』東京大学出版会、二〇〇五年には、当該文書は見あたらない。なお、木野主計『井上毅研究』統群書類従完成会、一九九五年、二六二頁参照。  
木本、前掲書、五六八頁以下は、この意見書の執筆者は井上毅ではないと断定し、尾崎三郎が執筆者であることを示唆している。もっとも、いずれの根拠も必ずしも明白ではない。

(32) 『秘書類纂 法制関係資料』上巻、九二頁。

(33) 堅田「學術論文・宮武外骨の法パロディ」九二頁以下。

(34) 同「尾佐竹猛と法の雑学——明治文化研究の一素描として——」『獨協法学』六八号、二〇〇六年、一頁以下。